

メラノーマとオプジーボの覚え書き(2021.09.01)

メラノーマは、悪性黒色腫という皮膚のガンである。ガンの中でもタチが悪く、メラノーマだけは罹りたくないと思っていたが、それが裏目に出たのか10年目に再発したのである。

オプジーボというのは、従来の抗がん剤とは異なるタイプの医薬品で、その功で京大の本庶佑先生はノーベル賞を受賞された。

左の足の裏、踵の近くにホクロ様の影を認め、京都府立医科大学付属病院で診察を受けたら、10年前の京大医学部のデータも取り寄せて検討した結果、メラノーマの診断が下りた。すぐに入院して拡大切除の手術がなされたが、カカトを含む手のひらサイズの面積の切除で、生活にも大きな影響が残るのは必至となってしまった。2020年の夏のことである。

退院して間もなく、外来診察で担当医から『念のためオプジーボによる治療を行う方が良いと思いますが・・・』との申し出があった。私はステージ4(転移していない)だと聞いていたので意外に思い、返事を渋っていると『ノーベル賞を取った良い薬があるのに、やらない手はないでしょう。』とのことで、私は一か月先の次の診察まで考えさせてくれと、猶予をもらった。

その一か月の間に、メラノーマの悲惨さなど思考は悪い方へばかり向かい、やはりオプジーボによる治療を受けようという気になってしまっていた。

この一か月の間に私がやるべきだったことは、いわゆるセカンドオピニオンで、

- ① 私のメラノーマは確かにステージ4か?(医師はステージ3と思い込んでいたことが後で分かった)
- ② PET検査、およびセンチネルリンパ腺検査で異常が検出されなかった。(間違いはないか)
- ③ オプジーボの副作用は?(全く説明が無かった)
- ④ 費用は?(健康保険でカバーされるから心配は無用との説明を受けた)

などを、できれば他の専門家や医師に相談して検討することだった。

一か月经ったその日、診察予約は9時30分であったが、9時前に医師がロビーに出てきて、『金田さん、どうぞ』と診察室に案内し、『金田さんはステージ4でしたね。オプジーボはどちらでもいいですよ・・・』というのではないか。しかし私の心は手遅れで、やはりオプジーボの治療をお願いしますと言ってしまったのである。

オプジーボは、初回は入院が必要で、12月7~8日に点滴により異状なく行われた。

2週おきにハーフサイズが4回、そのあとは4週おきにフルサイズで合計一年間行われることになっていたのである。

フルサイズ換算で6回目の点滴は5月10日に行われたが、そのあと間もなくひどい下痢が始まった。副作用の一つに下痢が挙げられてはいたが、余りにもひどいので次のオプジーボの予定日である6月7日には、中断の申し入れをしようと心に決めて病院に向かった。

ロビーで待っていると、他のスタッフが迎えに来て他の処置室に連れていかれ、事情を話すと『このまますぐに

入院してもらおう』と、有無を言わず入院させられた。後で分かったことであるが、**irea 腸炎**は重度の副作用で、検査のためには数日の絶食が必要だったのである。

精密検査の結果、副作用で脳下垂体のホルモン分泌機能が障害を受けていることが分かったので、コトリール錠を毎日服用することになった。この薬は量の調整が微妙で、副作用もきつい。副作用には下痢が挙げられており、私は再び下痢に悩まされることになった。

皮膚科・消化器内科・糖尿内科など、週2回ほどの通院が続いていたが、9月以降は月2回の通院で済むようになり、落ち着いた。

医薬品には必ず副作用が伴うのは知っていた筈であるが、いざ我が事となると忘却されていたのである。